

平成29年度 かわさきパラムーブメント推進フォーラム（第3回）

議 事 録

1 日 時 平成30年3月29日（木）13時～14時30分

2 会 場 川崎市役所 第3庁舎18階 大会議室

3 出席者

【委員】 福田市長（委員長）、成田委員（共同委員長）、遠藤委員、大塚委員、小倉委員、菊地委員、杉山委員、瀬戸山委員、丹野委員、土岐委員、中澤委員、北條委員、横島委員

【事務局】 伊藤副市長、鈴木市民文化局長、
市民文化局オリンピック・パラリンピック推進室 原室長、井上担当課長、
一ノ瀬担当課長、成沢課長補佐、鴻巣担当係長、太田担当係長、富山担当係長、
健康福祉局障害保健福祉部 宮脇部長、市民文化局市民スポーツ室 寺澤室長、
市民文化局市民文化振興室 高田室長、同局コミュニティ推進部 藤井協働・連携推進課長

4 議 題

- (1) かわさきパラムーブメント第2期推進ビジョンについて
- (2) かわさきパラムーブメント第1期推進ビジョンの総括及び第2期推進ビジョンの今後の取組について
- (3) かわさきパラムーブメントのレガシー形成に向けて

5 傍聴者 5名

6 会議内容

〈開 会〉

（原オリンピック・パラリンピック推進室長）

定刻になりましたので、ただいまから平成29年度パラムーブメント推進フォーラムを開催させていただきます。進行は私の方で進めさせていただきますのでよろしくお願い致します。

本日は、まだ瀬戸山委員と遠藤委員がお見えになっていませんが、時間がタイトなため、このまま始めさせていただきます。なお、本日、中森顧問、日比野顧問、須藤委員、中村委員、山崎委員、山田委員については欠席の連絡をいただいておりますので、宜しくお願いいたします。

始めに、何件か事務連絡をさせていただきます。本日のフォーラムですが、公開としておりますので傍聴を許可しておりますことを御了承いただきたいと思います。また、会議については、発言内容を記録して発言者の氏名等を含めて後日ホームページで公開させていただきますので、よろしくお願い致します。本日、傍聴の方がいらっしゃいますので、会場に提示しております遵守事項をお守りいただきますようお願い致します。

本日の配布資料は、お手元の上から次第、座席表、委員名簿、フォーラムの要綱、続きましてA4の資料1、A3の資料2、A3の資料3、A4の資料4、その後にA4横の資料5、それ以外に「第11回ようこそ自閉症ワールドへ」というチラシと障害者スポーツ協会の会報がお手元にあるかと思い

ますが資料の過不足等ございませんでしょうか。

それでは、開催に当たりまして、福田市長から御挨拶を申し上げたいと思います。市長、よろしくお願いいたします。

《 1 あいさつ 》

(福田市長)

改めましてこんにちは。年度末の大変お忙しい中、御出席いただきまして誠にありがとうございます。このフォーラムを開催すると、毎回、成田さんの競技記録のことに触れる機会ができて、それほど活躍されていらっしゃるわけですが、今月も記録会で素晴らしい成績を出され、パンパシフィックパラ水泳選手権大会の日本代表とアジアパラ競技大会の日本代表推薦候補に決定されたということで、フォーラムの度に成田共同委員長の御活躍のお話をさせていただけることをありがたく思っていますし、私たちメンバーとしても誇らしい限りだと思っています。

(成田共同委員長)

ありがとうございます。

(福田市長)

平昌オリンピック・パラリンピックも終了し、やはりスポーツって素晴らしいと私たちも感じたところでもあります。今後は、平昌のレガシーはどうだったのかをもう一回検証して、私たちの教訓として学ばなくてはいけないと思います。あと2年で東京大会となるので、着実にこれから進めていかなければなりませんし、かわさきパラムーブメント第2期推進ビジョンについて、どうやって市民を巻き込んで具体化していくかを今日は議論させていただいて、各委員の皆さんから活発な御意見をいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

(原オリンピック・パラリンピック推進室長)

ありがとうございます。続きまして成田共同委員長から御挨拶いただきたいと思います。

(成田共同委員長)

皆さん、こんにちは。昨日2020年大会の組織委員会の理事会に行き、ボランティアのことなどを協議しました。今回、マスコットが決まったときに、近所の子どもたちが「私たちのクラスは『ウ』案に入れたの」「私たちのクラスは『ア』案に入れて通ったの」とすごく喜んでくれている姿を鮮明に覚えていて、だからこそ、中高生でも何かしら関わるが必要なのではないかと思いました。今回、マスコットを考えるのに子どもたちがこんなに盛り上がってくれたので、これからの2年間でうまく続けていかななくてはいけないのではないかと感じました。私は、月2回、共同通信でコラムを書かせていただいておりますが、発信をしていかななくては変わらないと思っていますので、いろいろなかたちで発信し続けていくことは、これからの2年間でとても重要になってくると思っていますので、よろしくお願いいたします。

(原オリンピック・パラリンピック推進室長)

ありがとうございました。会議の進行につきましては、委員長である福田市長にお願いいたします。また、共同委員長の成田委員につきましても進行の補助をよろしく申し上げます。

≪ 2 かわさきパラムーブメント第2期推進ビジョンについて ≫

(福田市長)

それでは、資料1「かわさきパラムーブメント第2期推進ビジョン」について、事務局より説明をお願いします。

(井上オリンピック・パラリンピック推進室担当課長)

オリンピック・パラリンピック推進室の井上でございます。

それでは説明させていただきます。資料1を御覧ください。第2期推進ビジョンにつきましては、8月に骨子や「目指すもの」と理念を、11月には素案に近い構成イメージや9つのレガシーを説明させていただきましたが、この度、一昨日になりますが、庁内における合意形成を経て正式に策定されました。

つきましては、これまでの確認も含めて、今回初めて説明させていただく部分を中心に、触れさせていただきます。1ページ目を御覧ください。「1 策定の目的」ですが、こちらは以前に説明したとおり、大会を契機にその価値を最大限活用して、「目指すもの」と理念、そして未来へと遺していく「レガシー」を市民の皆様と共有し、取組を進めていくために策定するものとしております。

次に2ページ目「2 第1期推進ビジョンの総括」です。こちらの内容も以前の説明から変わっておりませんが、「(1) 行政計画としての課題」として、「目指すもの」や理念、また大会との関係、レガシーなど、関係性が曖昧であった部分が一部ありましたので、2期推進ビジョンではそこを整理していくということです。また、「(2) 第1期推進ビジョンに基づく取組」の実績として、推進フォーラムにおいて、意見交換を行い、御提案をいただきながら、リーディングプロジェクトとして実施してきたことに触れ、3ページ目「エ その他の課題等」にございますように、今後、パラムーブメントをより大きなうねりとしていくには、市民の皆様、招かれる側の「ゲスト」としてだけでなく、「キャスト」としても参画していただくことが必要であるとしております。

次に4ページ「3 第2期推進ビジョン」についてですが、「(1) 性質」として、本市で取り組む行政計画としての要素と、さらに、多様な主体との協働・連携で取り組むものや、市民の皆様が取り組むものとしての社会計画としての要素の2点があるということ。「(2) 構成」としては、5ページの図にございますように、上から「目指すもの」、「理念」、「レガシー」、「5つの取組の方向性」、「推進にあたっての視点」となっております。

「(3) 取組期間」につきましては、6ページの図にございますように、2018年度から2021年度までの4年間となっておりますが、レガシーの形成については、市制100周年となる2024年、さらにはその先を見据えて推進していくものです。

7ページ「4 社会的背景」については、「(1) 東京2020大会の開催」をはじめ、8ペー

ジ「(2)人口構成の変化を見据えた対応」や、10ページの「障害者差別解消法」、「ユニバーサルデザイン2020行動計画」といった法令等の整備が背景となっております。

12ページの「5 かわさきパラムーブメントによって目指すものと理念」ですが、目指すものとして「誰もが自分らしく暮らし、自己実現を目指せる地域づくり」、理念として「人々の意識や社会環境のバリアを取り除き、誰もが社会参加できる環境を創出すること」としております。

14ページ「6 レガシーとその考え方」ですが、第1期推進ビジョンにおける19のレガシーを整理統合し、9つのレガシーに見直しを行いました。そのレガシーをどのように形成していくのかについては、15ページをご覧ください。

ここは読み上げさせていただきます。1行目からになりますが、「既存の事業内容を前提とすることなく、個々のレガシーの達成のために、誰を対象としてどのような状態を創出し、そのためにどのような取組をしていくのか、といった点について関係者とともに順序立てて検討・実施していく必要があります。こうしたことから、2期ビジョンにおいては、『何(誰)がどのようなになったらレガシーが形成された状態』とするのか、理想の状態を明らかにし、2期ビジョンの取組期間の中で、様々な関係者と対話を重ねて本ビジョンの考え方やレガシーを共有するとともに、成果指標とその達成に向けた具体的な取組を検討して『本市が主体的に取り組むもの』『多様な主体の協働・連携で取り組むもの』『市民が主体的に取り組むもの』とに分類した上で、それぞれの主体が各々順次実施することとします。また、成果指標については、達成に向けて多様な主体が取り組み続けるための指標としての位置付けとします。なお、『レガシーが形成された状態』は、第2期推進ビジョン取組期間中にこれらの対話を経て変更になる可能性もあります。」というところでございます。

これは、「パラムーブメントという運動は、一体、具体的に何をするのか？」ということを考えるときに、「何をを目指すのか？ どういった状態を作り出していくべきなのか？」ということが曖昧な状態で、関係者間でズレがあるまま、違うベクトルに向かって取組を実施してしまうというようなことは避けなければいけませんので、そのために、このレガシーと、レガシーが形成された状態はとても重要だと考えております。これから、スピード感は持ちながらも、関係者と丁寧に対話をして、意識合わせをしっかりと行い、達成に向けた具体的な取組を一緒に考えながら、進めていきたいと考えております。

それでは、16ページをご覧ください。「7 パラムーブメントにおけるレガシー」でございます。9つのレガシーについては変わっておりませんが、レガシーが形成された状態は、今回の開催通知とともに、皆様に事前にお送りさせていただきましたが、初めてお示しするものでございます。

まず、「① 多様性を尊重する社会をつくる子どもを育むまち」。こちらのレガシーが形成された状態というのは、資料右側にある、「義務教育を終えた時点で、すべての子どもたちが、人は平等であり、かつ、あらゆる機会の提供は公平であるべきことを理解しており、誰もが各々の個性を互いに尊重し合っている。」「義務教育を終えた時点で、すべての子どもたちが、共生社会の担い手としてお互いに助け合い支え合うことの大切さを理解し、実践的な態度が身についている。」「大人たちが、自他の個性を尊重し助け合うことを実践し、子どもたちの模範となっている。」としております。

続きまして、17ページ「② 心理的バリアが解消されたまち～心のバリアフリー」についてです。こちらのレガシーが形成された状態というのは、「すべての人が、自他の個性を尊重し、相互にコ

コミュニケーションをとることができる。」「すべての人が、自らの心のバリアを取り除く実践的な行動をとっている。」「社会的マイノリティの当事者が、自分たちも社会を構成するかけがえのない存在であることを確信し、社会生活上のバリアを取り除くうえで必要なことを他者に伝えられている。」としております。

次に 18 ページ「③ 社会的バリアが解消されたまち～ユニバーサルなまち～」です。レガシーが形成された状態としては、「すべての人が、自らの意志で行きたい所に行け、行った先で自由に行動ができる。」「すべての人が、言語、心身の個性の違いを意識することなく、サービスを楽しんでいる。」「すべての人が、あらゆる情報に公平にアクセスできる。」としております。

続きまして 19 ページ「④ 誰もがスポーツ・運動に親しんでいるまち」です。レガシーが形成された状態としては、「すべての人にとって、身近な場所でスポーツをするための環境が整っている。」「すべての人にとって、公平にスポーツを観戦できる環境が整っている。」「すべての人が、日常的にスポーツ・運動に親しみ、楽しみ、体力の維持向上や健やかな心身を育てている。」としております。

続きまして 20 ページ「⑤ 誰もが文化芸術に親しんでいるまち」です。レガシーが形成された状態としては、「すべての人が、文化芸術活動に携わることができる環境が整っている。」「すべての人が、文化芸術に親しみ、楽しめる環境が整っている。」としております。

続きまして 21 ページ「⑥ 多様な主体が地域づくりに貢献しているまち」です。レガシーが形成された状態としては、「すべての人が、自らが住まうまちの将来の姿を共有して、自らの能力を活かして活動を実践し、コミュニティの一員となっている。」「自らが住まうまちの地縁型の活動やテーマ型の活動にかかわらず、参加できる環境が整っている。」としております。

22 ページになりまして「⑦ 誰もが職業等を通じて社会参加できる環境」です。レガシーが形成された状態としては、「すべての人が、社会参加しようとする意欲を持っている。」「すべての人が、お互いの個性を理解し、一緒になって仕事や、趣味、学習活動等を行っている。」としております。

23 ページになりまして、ここからは、川崎のブランド力に関するレガシーとなりますが、レガシーが形成された状態としては、「⑧ 来訪者が『行ってよかった』と思えるまち」については、「川崎を目的地として多くの人々が訪れている。」「川崎への来訪者が、その後、川崎の魅力を発信している。」としております。

24 ページになりまして「⑨ 知名度・プレゼンスが高まった川崎」です。レガシーが形成された状態としては、「川崎が、様々な分野におけるテクノロジー開発などで世界の最先端にあることが国内外で認知されている。」「川崎の魅力や特長が国内外で認知されている。」としております。

以上、9つのレガシーと、レガシーが形成された状態がございます。これらについては、後ほど、次第4になりますが、皆様からレガシー形成に向けた御意見をいただきたいと思っております。

最後に 25 ページの「8 パラムーブメントの推進に資する本市の取組」ですが、先ほど、「既存の事業内容を前提としない」ということをお話いたしました。一方、既存の市の取組においても、パラムーブメントの推進に資する取組がございますので、ここでは、そうしたものを 32 ページまで紹介しております。説明は以上でございます。

(福田市長)

これにつきまして御意見や御質問はありますでしょうか。

それでは、次の議題に移ります。事務局から説明をお願いします。

≪ 3 かわさきパラムーブメント第1期推進ビジョンの総括及び第2期推進ビジョンの今後の取組について ≫

(井上オリンピック・パラリンピック推進室担当課長)

ここでは、これまでの2年間の主な取組と、来年度に予定している主な取組を紹介させていただきます。この後の次第4「レガシー形成に向けて」の意見交換を行う際の参考としていただければと思います。それでは、資料3を御覧ください。

まず、資料左側の「① 総括的な取組」ですが、これまでの取組としては、パラムーブメントのシンポジウムや、ラゾーナでの PARA フェスの開催、またロゴとPR動画の作成のほか、今月になりますが、市民参加型プロジェクト「かわさきかってにおもてなし大作戦」のキックオフイベントを開催しました。

ここで資料4を御覧ください。今月10日の土曜日、市役所第三庁舎の1階ホールで開催しました。当日は、本フォーラムの委員でいらっしゃる、コミュニティデザイナーの山崎亮さんと、建築コミュニケーターの田中元子さんをお招きして、トークセッションとワークショップを行いました。

この日のキーワードは「マイパブリック」というもので、自分が楽しいと思うことを、町に出てちょっとやってみるといふ、新しくてゆるい社会貢献のひとつではありますが、それをテーマに参加者の皆さんには、オリンピックのメダルを模したドーナッツで作ったメダルを、くじ引きで金・銀・銅を決めて、首にかけてもらい、それを食べながら、ワークショップを行いまして、「どんなことを、誰に対して、どんな場所でやってみたいですか?」というお題で、アイデアを出し合って、資料の4ページのように、ドーナッツ型のアイデアシートに書いてもらい、壁一面のドーナッツウォールを完成させましたが、非常に独創的で面白いアイデアをたくさん共有することができました。

それでは、資料3にお戻りください。「① 総括的な取組」の一番右側にある、2018年度の破線の囲み部分が主な取組予定のものになりますが、PR動画第2弾の公開やネックストラップなどの広報グッズの制作・販売、また、「かわさきかってにおもてなし大作戦」の取組をさらに地域レベルで展開していく予定です。

次に「② ひとつづくり」については、これまでの取組としては「障害者の就労体験の実施」、これは、本日御欠席ですが須藤委員からの報告書を資料5としてお配りしております。昨年度の実績として延べ486名の参加、今年度はまだ確定値ではありませんが、延べ739名の参加がございました。また、「短時間雇用創出プロジェクト」や「障害者によるアート作品を活用した製品(名刺)づくりの支援」、また、昨年12月に「発達障害を手掛かりとして考える心のバリアフリーシンポジウムの開催」、加えて、窓口対応職員が中心になりますが、庁内職員向けに心のバリアフリー研修を受講してもらい、民間資格であるユニバーサルマナー検定3級の資格を取得してもらいました。2018年度は、「ライブペインティングの実施」ということで、これは、市の施設の工事仮囲いなどをキャンバスにして、アーティストの指導を受けながら、障害の有無に関わらず、地域の子もたちを中心に絵を描いてもらうというものでございます。また、「飲食店等におけるパラムーブメン

トロゴの活用」ということで、これはロゴの「パ」を描いたステッカーを賛同していただける店舗に掲示してもらうという取組でございます。

次に「③ スポーツ振興・健康づくり」ですが、これまで「パラスポーツやってみるキャラバン」では、今年度は私立も含め小学校 21 校、地域の寺子屋 5 か所で開催しました。また、「全国規模の障害者スポーツ大会の開催」としては、日本アンパティサッカー選手権大会やジャパンデフバレーボールカップ、ブラインドサッカーチーム選手権、関東ボッチャ選手権 神奈川大会などが市内で開催されました。

そのほか、「障害者スポーツ普及促進事業」や「誰でもスポーツ広場」、「障害者スポーツデー」を開催しました。2018 年度は、「教員向けの初級障害者スポーツ指導員養成講習会の実施」ということで、これまで主に一般の方やスポーツセンターの職員を対象に行っていましたものを、来年度は教員やスポーツ推進委員等にも受講していただく予定です。また、「障害者スポーツ用品の購入」については、今年度は車いすバスケット用の車いすを 10 台購入しましたが、来年度はボッチャやフライングディスクなどを購入して、障害者スポーツデーなどで活用する予定です。加えて、「パラスポーツやってみるキャラバン」は、特別支援学校でも実施していく予定です。

次に、「④ まちづくり」ですが、2016～17 年度では、「宿泊施設等バリアフリー化促進プロジェクト」や、ぐるなび様と連携して取り組んだ飲食店のバリアフリー調査とその情報発信がございました。このほか、「アクセシブルシティかわさき」、「スポーツ施設のバリアフリー化の推進」や「駅・道路などにおけるバリアフリー化の促進」、「UD タクシーの普及や利用環境の整備」などを行いました。2018 年度は、「道路標識の英語標記の改善」や「とどろきアリーナなどのバリアフリー化の推進」、また、川崎市バリアフリーマップという冊子があるのですが、これが平成 24 年に作られた後、更新がされていないため、来年度以降、あり方も含め、改定に向けた作業を行っていく予定でございます。

次に、「⑤ 都市の魅力向上」ですが、2016～17 年度には「インクルーシブなカワサキハロウィン」、「多言語による観光情報等の発信や施設案内」、「ホテルシップ受入れの検討」、「パラアート・プラットフォームの準備」、また先月には、川崎駅北口行政サービス施設（かわさききたテラス）が開設されたところでございます。2018 年度は、「かわさきパラコンサート」や「（仮称）パラアート展覧会の開催」を予定しております。

最後に、「⑥ 先進的な課題解決モデルの発信」ですが、2016～17 年度は、「殿町国際戦略拠点（キングスカイフロント）の形成」などの取組を行いましたが、2018 年度は、今月策定・公表された臨海部ビジョンに基づく各種取組を推進していくものでございます。

大変雑駁ではございますが、説明は以上です。

（福田市長）

これにつきまして、御意見、御質問はありますか。

（大塚委員）

まちづくりの部分のバリアフリーマップの改定ということで、平成 24 年度に作られたということでしたが、これは紙媒体だけで何部ぐらい作られたのでしょうか。

(井上オリンピック・パラリンピック推進室担当課長)

発行部数は確認しておりませんが、紙媒体で公共施設を中心としたバリアフリー情報一覧が載っているものです。

(大塚委員)

私が住んでいる地域でも5年前に作りましたが、作ったのは良いが全くはけず、非常にもったいないことがありました。Web版やスマホ版も絡めてできれば良いと思いました。

(福田市長)

(冊子を見ながら)確かに自分たちで作っておいてなんですが、50ページもありなかなかですね。

(成田共同委員長)

Webで見られれば一番いいですね。昨日、東京ミッドタウン日比谷のプレオープンイベントに参加したのですが、調べたら「日比谷駅 A11 出口直結」と書いてあるのですが、東京メトロのホームページでは閉鎖中となっていました。そこで、自分の場合、A11が使えないとなると、A9出口から地上に出なくてはいけなくて、それからどうしたら良いかわからない状態でしたが、実際は昨日からプレオープンということでA11出口が開いていて、雨でもぬれずに行けるということがわかりました。そのようなとき、50ページを持ち歩くより自分で持っているスマホで瞬時に調べられる方が便利だと思います。

(福田市長)

そうですね。明らかに6年前とスマホ環境も通信環境も違えば、日々変わるものをアップデートしていくことが重要ですよ。ですから、おそらく紙媒体はこれからほとんどなくなっていくことでしょうね。

(大塚委員)

一方で、自分の住んでいる地域では、御高齢の方が手に取って見たいという要望があったので大幅に増刷したのですが、あまり作りすぎるのも問題かなと思います。

(小倉委員)

資料中「⑤ 都市の魅力向上」の2018年度の取組として、「かわさきパラコンサートの開催」とありますが、現在宮前区で同様のものが行われていますが、内容はどのようなものなのでしょうか。

(井上オリンピック・パラリンピック推進室担当課長)

「かわさきパラコンサート」は、昨年のパラフェスがスポーツに焦点を当てたものであったので、音楽・文化芸術部門にも力を入れていこうということで、今年の5月19日(土)にカルッツかわさ

きのホールで開催します。内容としては、荒川知子さんというリコーダー奏者とその御家族による演奏やピアニストの梯剛之さんによる演奏に加え、昭和音楽大学関係のオーケストラと地域で活動している合唱団による合唱などを予定しております。

(成田共同委員長)

「③ スポーツ振興・健康づくり」の今年の実施で、「教員等向け初級障害者スポーツ指導員養成講習会」というのは、どこかにお願いするのでしょうか。つまり、興味を持った先生だけが受講するのか、又は学校全体で取り組むのか、最低でも何人ぐらいは受講しようとかスローガンを掲げるとかどうなっているのでしょうか。

(寺澤市民スポーツ室長)

指導員養成講習会については、来年度初めての取組となりますので、まずは、障害者の方がスポーツに親しむきっかけづくりということで行う予定です。そのため、まだ学校ごとに何人受講させるというような目標までは掲げておりません。

(成田共同委員長)

わかりました。学校の先生に興味を持ってくれたら、絶対に子どもたちに「こういうスポーツがあるんだよ」とストレートに伝えてくれるのではないかと思ったので、なるべく多くの教員の方たちに受けてもらえたらいいなと思います。そのための働きかけが必要なのではないかと思います。ただポスターを持って行って貼るというよりも、先生たちをワクワクさせるようなものにして、「私たちやります！」と言ってもらえるようなアクションを起こさせるものであったらいいと思います。

(福田市長)

今、教育委員会とはどのくらい擦り合わせているのでしょうか。

(寺澤市民スポーツ室長)

こちらにつきましては、市民文化局の方だけでまだ教育委員会とは擦り合わせておりません。

(横島委員)

この初級障害者スポーツ指導員養成講習会は、障害者スポーツ協会も協力して行っていますが、一般募集をしたところ、スポーツセンターの職員や館長なども含めて様々な方の応募がありました。しかし、その募集にもれてしまった方がいらっしゃるということで、また、スポーツ推進委員の方などにも広めていった方が良くはないかとの意見もいただき、それならば受講内容を御自身の業務に活用できる、専門性の高い方にぜひ受講していただきたいということで、今回2部に分けて実施するかたちとなりました。

(成田共同委員長)

結構、皆さん興味を持ってくれているということですね。

(横島委員)

はい。そうです。

(小倉委員)

子どもたちに障害者スポーツを認識させるには、学校教育の中で、体育の先生など誰でもいいですが、学校内でそういう資格を持った方がいるのが良いと思います。スポーツ教室に行けばそのような方がいますが、スポーツ教室に行かない子はそのような方に接することができないので、できれば各学校で最低二人ぐらいいは受講してもらい、その内容を啓発していく方を増やしていければ一番良いと思います。

(福田市長)

まだ教育委員会と詰めていないという話なので、市民文化局の方から教育委員会に伝えてもらって、中学校なら保健体育の先生になるでしょうし、小学校ならどのような方に受けていただくのが効果的なのかという検討も含めて、議論を進めるかたちが良いと思います。

(原オリンピック・パラリンピック推進室長)

来年度は、横島委員からただいまお話があったように少し計画的に拡充していく方向で考えていますし、小学校の教員については、やってみるキャラバンでここ2年間行っているのですが、その意味では関心が高まっていますので、計画的にどのようにやるのか考えていきたいと思っておりますし、今日は御欠席ですが日本パラリンピック委員会の中森顧問もいらっしゃいますので、協力していただける可能性があるのかも含めて考えていきたいと思っております。

(福田市長)

いずれにしてもこれは単年度でやる話ではなく、ずっと続けていって全体をどうするのか、そのうちで来年度をどうするのかというふうに決めていってほしいと思っております。

他に何か御意見ございますか。よろしければ、これについては終わりにして、続きまして次第4「かわさきパラムーブメントのレガシー形成に向けて」ということで、資料2の3ページにある、「パラムーブメントのレガシー」及び「レガシーが形成された状態」について、どのような取組を行えば実現できるかということを皆様の専門分野に即して、2～3分程度で御意見をいただきたいと思っております。それでは席順ということで成田共同委員長からお話いただいてもよろしいでしょうか。

(成田共同委員長)

私がこの2年間で、選手の立場で何が変わったかということ、実際あまり何も変わっておりません。少し言えば、千代田線がすべての車両に車いすとベビーカーのスペースが作られたのでとても便利

なのですが、小田急線は電車が来るまで、そのスペースがどこにあるのかわからないという状態なのは変わらないです。なぜ変わっていかないか考えたとき、多分ここにいらっしゃる皆さんはわかっていると思いますが、対応の仕方を知らないからということなのだと思います。今日、ここに来るのに私が電車に乗ったときに、中にいた中学生が私に対してどう接したらいいかわからないという状況がありました。とりあえず私がつかまったら、それで良いのかなという感じで、結局どうしたらいいかわからないのです。ですから、どうしたらいいかを伝えなくてはいけない。そのために何をしなければいけないのかという「発信」なのです。興味を持ってくれたら、自分たちがどうすればいいか考えてくれると思います。

今まで知らないのは当然なのですが、今日の中学生たちのように、車いすの人のためにスペースを空けてあげればいかなと気づいてもらうことが大切なので、そのために発信していかなくてはと思っています。ここにレガシーが9つありますが、何をすべきか考えなくてはいけないことがたくさんありますが、少なくともエレベーターができるようになったとか、車いす用トイレが本当に車いす利用者用になって、健常者の人の利用が少なくなったとかありますが、車いす用トイレについては、まだ普通の男性の方が使っていたりして、まだそうは言いきれません。問題は、そのような状況をどうしたらいいのかということです。だからと言って諦めるのはだめなので、2年後に東京パラリンピックが開かれるので、もっと発信していかなくてはいけないと思っています。

(中澤委員)

今の話は、私が委員を務めている東京都の観光事業審議会でも出てきた話と同じで、子どもたちの教育は反応が良かったのですが、一番問題は親の世代なのです。親がどうしたらいいかわからないから、子どもたちにこうしたらいいんだよと言えないことが問題だと思います。このままでは2020年までに追いつかないというのはそういう問題があるからだだと思います。誰が教えるのかといっても、誰も出てこないのでも何も変わらない。小学校で対応の仕方を教えたといっても、成田さんがおっしゃったように、車いすの方用の特別な席がない場合にどうしたらいいのかということろまでは学校で教えてくれません。自分で経験するなどしないとわからないと思います。ですから、心のバリアフリーといった教育においては、もっと具体的な内容のものが必要だと思っています。

(成田共同委員長)

今度、東京都の小中学校の校長先生の前で講演してくるので、きちんと話をしていきたいと思います。

(福田市長)

どう親世代に伝えるのか、どう教えていくのかというのは、具体的にどうすればよいのでしょうか。

(成田共同委員長)

イベントを増やすとか興味を持ってもらうとかだと思います。子どもは伝えればわかってくれるので、学校の先生に伝えていくしかないですし、小学校4年生の福祉の時間では、手話や点字等を

勉強してくれます。ですから、それ以外のところで、障害の持っている方と関わる必要があるのではないかと思います。身近に障害を持った人と接していれば、それが特別なことではなくなると思います。

(原オリンピック・パラリンピック推進室長)

今、おっしゃられたことは、レガシー②の「レガシーが形成された状態」の中の「すべての人が、自らの心のバリアフリーを取り除く実践的な行動をとっている」に関連する部分だと思います。これは、私も非常に重い課題だと思っています。例えば、環境面でいうと、川崎駅構内のエレベーターには、どのような方が優先されるかという表示がありますが、駅を降りると1階に降りるエレベーターや地下街に降りるエレベーターにはその表示がありません。こういうことから改善できないか、現在関係部署とこのような表示をつけられないか調整をしております。

また、かわさききたテラスが先月オープンしましたが、「筆談ボードあります」という表示がなかったのですが、それを必要とするお客様が来られたので筆談ボードを用意するなど、そのような環境も徐々に取り入れながら皆さんにそういうことの重要性を知っていただく、環境面の取組を行っております。そうすると、川崎駅周辺はすべてバリアフリーになっているので、その点をもう少し発信して皆さんに理解してもらうことも一方で必要だと感じています。

(中澤委員)

今のお話でも、実は日本の公共交通機関では、障害者優先の制度はできているのですが、実際には優先されていません。海外の方、特に先進国の方は、親がそのような対応ができていますので、子どもも皆できています。私の感覚では、日本人の場合は2～3割程度、一番わからないのは高齢者世代のようです。その解決のためには、教育というのではなく、例えば会社単位で協力してもらって、社員に体験してもらう。実際に譲り合う気持ちを具体的にどう表せばよいのかを考えて、周りの社員も自分の周りにどう伝えるのかということを考えてもらうなどして取り組んでいくしかないと思います。そうでもしないと変わらないし、行政だけでなく民間もやらなければいけないと思います。

(福田市長)

そうですね。とても大切なテーマであるので、時間が余ったらもう一回戻ってきましょう。

(遠藤委員)

私はスポーツの現場、特に陸上競技に関係している身として、ここ数年オリンピック・パラリンピック関連のイベントや選手の育成に携わったりして感じていますが、ものすごい認知度が上がったというニュースは見ますが、成田さんが先程おっしゃったようなことは問題意識を持っています。たぶん、「パラリンピックを知っていますか」という軽い質問には、「イエス」と答える方は増えたと思います。これは、今までの成果だと思えますが、それではこの先何があるか、今までやってきたことの延長線上に何があるかという、「ない」と思ってしまいます。

例えば、オリ・パラのイベントに呼ばれて出展したりしますが、主催者が変わるだけで中身は他のイベントと同じということが多いです。パラリンピック選手も結局目指す人はだいたい限られて

いて、用具とかを持っている人も限られているので、イベントの中身がほとんど同じで、お金の出所が違うということが日本各地で行われていると感じます。

もちろん、川崎は川崎に縁のある方が出ているイベントはあるかもしれませんが、私が見ているようなところでは、認知活動として成功しているのはそういったイベントが多いなという印象を受けています。なぜ、こういうことが起こっているかということ、オリ・パラの実態が、スポンサーや組織委員会が公的なところとか、スポンサーに限られているところにとってもったいなさを感じています。例えば、「パラスポーツやってみるキャラバン」で、以前川崎市の方と話し合ったとき、東京都が「オリ・パラ推進校」を全校に割り当てて、オリ・パラに関する教育を行うための予算を充てています。それで、我々は、LIXIL（リクシル）さんと組んで、スポーツ義足の体験会授業と選手たちを呼んでの交流を行っています。これで川崎市でも何かできないかと話をしたとき、やっぱりLIXILという名前があるのと、「やってみるキャラバン」の関係者間の調整がつかず、話がうまく進まなかったということがありました。LIXILという名前が気になったのかどうか分かりませんが、要は、オリ・パラのスポンサーでないといけないことが結構多いところがあります。

しかし、車いすや義足の体験会等を安定供給できるところはほとんどないです。だからといって、行政も組織委員会でもできないので、限られたスポンサー、民間の方たちの手を借りる必要がありますが、こういったことには利権が発生していて、そこに参加できないがパワーを持っている人たちというのも多いと思います。そういう人たちをどのように巻き込んでいけるか、これはオリ・パラだけでなく今後も続いていく話なので、オリ・パラがきっかけになって市民レベルに落とし込んでいくプロセスというのが見えてないのが、一つの原因ではないかと思っています。

もう一つ付け加えさせていただくと、障害者の陸上競技を知っている人は増えましたが、競技場に行っても観客はいません。だから、スポーツとして面白くないのだろうということは感じています。そのため、私たちができる地道なレベルとして、選手を増やすことや選手の育成を行っていますし、用具を買う等の支援も必要ですが、それをサポートする人たち、例えば、義肢装具士が義足を作るが、板バネという競技用義足をつけたことがある人は、日本人ではあまりいないため、義肢の方の対応をしたことがない医者が多く、東京の限られたクリニックでしか扱われていないため、アスリートしかスポーツ義足を付けられないといった状態になっています。そのため、トップアスリートはお金を払ってでも、そういった道具を使うのですが、スポーツの中で「走る」というのは、敷居が一番低く、また、皆がやるべきスポーツだと思うので、これを広げていくのに用具を供給する、それを付ける人も育成するという周辺環境を整えるところが今足りていないと感じています。

（小倉委員）

私の場合は、多様性についてお話ししたいと思います。多様性にはいろいろあり、資料では、レガシーが形成された状態として、こうなったらいいなというイメージが書いてありますが、そのため何をするかということで、私は、長年外国人や障害者の支援を行っていますが、現状を知らないということが一番原因だと思います。いかに現状を確実に伝えられるか、今でこそ、いろいろな障害をお持ちの方が地域の中に出られて、現状を知られるようになりましたが、昔はそうではありませんでした。その中で、正しい知識というのを特に子どもたちに、学校教育の中で障害者・外国人・高齢者の本当の現状を理解できるようなプログラムを入れていかなければならないと思います。

先ほど、大人が障害のある方への対応を知らないという話がありましたが、そこは子どもにきちんと教育をして、子どもが先生から教わったことを、今度は親に伝えるような方向で正しい認識を持ってもらうようにすべきだと思います。そして、障害者や、外国人、高齢者、認知症の方とかを健常者と障害者と分けるのではなく、皆それぞれ何かの個性を持っているという理解をすること、健常者でも考える力や、知的能力、体力がそれぞれ違うように、違っていることをそれぞれが認識して理解することが大切だと思います。「みんな違ってみんないい」ということは、みんな違うことを理解できる、相手を否定するのではないということを知ることと、もう一つは、子どもに自己肯定感を持たせる教育、他者を尊重する態度を身につける教育をすることが大切だと思います。一つのやり方としてはディベートがあります。外国語で行われることもあるが、自分の子も小学校3年生くらいからカナダで教育を受けてきました。そこでは、Aの立場、Bの立場でそれぞれ良いことを主張して、次に立場を逆転させて考えさせることで、どれが良くて何が弱点かを理解するようなプログラムを小さい頃から入れることにより、他者の立場を理解することができると思います。

(福田市長)

今の遠藤さんと小倉さんの話から、認知するレベルから理解することへの深まり、学校教育だと1年生はこれをやって、2年・3年・4年生はこれやってと理解を深めながら、全体をカバーできますが、一般の150万市民に対して、例えば、行政計画2年ごとに行っていくのは難しいと思います。それは、初めて聞いたという人から、現在理解している人がさらにそれを深めていくとか、レベルがバラバラだからだと思います。ですから、まだ認知していない人には認知を、理解をさらに深めていくには深める政策を同時並行的に重層的にやっていかないと、誰にとってもハッピーではない状況になると思います。ですから、そこをどううまく具体的なものでかみ合わせていくかということだと思っています。まさに、第2期推進ビジョンのところでも具体的にどう作っていくのがこのプロジェクトの大変なところだと思います。

(小倉委員)

一般的な市民に対して、例えば市政だよりの一部に小さなコラムを入れて、「こんなことがあるんだよ」ということを毎掲載していくとか、それからどこかの新聞社、例えば神奈川新聞や東京新聞など地域密着型のところで、いろいろな立場の人による啓発コラムを載せていくことなどを行えばいいのではないかと思います。そして、それがネットで見られればなお良いと思います。新聞や市政だよりは、皆さん読まれていますから一つの方法だと思います。

(菊地委員)

私、現場を持ってやっている立場から、レガシー④「誰もがスポーツ・運動を楽しんでいるまち」について、その中のレガシーが形成された状態、「すべての人にとって、身近な場所でスポーツをやる環境が整っている」という点について、これは、本市だけでなく日本全体で障害者にかかわらず、一般の国民、市民もスポーツをする施設がまだまだ不足しているのが現状だと思います。ただ、いろいろな動きがある中で、私も3年前くらいから、スポーツセンターを運営している立場もあり、

障害者スポーツをやるべきだと思って関わってきましたが、この3年間で非常に成果があったと思っています。先程の障害者スポーツ指導者の資格にしても、市障害者スポーツ協会の方に頑張っているという話は先ほどもありましたが、なぜいろいろできないかというと、講習会のキャパシティーが足りないからです。一昨年前に、ある講習会の枠が全然足りなくなり、少なくともスポーツセンターの職員とスポーツ推進委員も含めて、もう少し機会を増やして勉強してもらいたいと倍近くしてもらいましたがまだ全然足りません。ですから、講習会をやる指導者の方や、場所・実施機会を増やしていただくと、参加を希望される方が増えているので助かると思います。

話は戻りますが、そういった指導資格を持っている方やスポーツ推進委員の方、公認スポーツ指導者の方など、いろいろな方が障害者スポーツに興味を持って意見交換をしていることは事実です。それでは何をするかというのがこれからの問題ですが、そういったムーブメントをさらに続けていければいいなと思っています。

よく「場所がない」「行く機会がない」という話が出ますが、私は、場所は決してないわけではないと思っています。例えば、地域の老人いこいの家など小さな施設でも健康づくりやコミュニティの場として十分活用できる場所だと思います。特に学校の施設開放、特別支援学校などは、実は施設が豊富にあります。ただ、なぜできないかというと、その管理・運営・指導する人材がないからということで、ここに人を置くことができれば、場所はまだまだあると思いますし、機会はもっと増えてくると思います。ぜひ、特に学校施設に関して、こういった活用が増えてくるともっと良いと思います。

3年間の中で、総合型地域スポーツクラブや市障害者スポーツ協会の指導を受けながら、実はたくさんイベントや研修会、講習会を小規模ながら行っていますが、なかなか発信しきれずに、皆さんに情報が入らず、参加者が少なくなってしまうという現状があります。来年度も再来年度もスポーツセンターでは「障害者スポーツデー」という位置付けで障害者スポーツを取り組んでいきますし、参加者や実施回数は少ないが実績としてやってきたので、一番大事な情報は情報をいかに伝えていくかの方法だと思います。先程おっしゃられていたように、紙媒体も必要ですし、SNSも必要ですし、様々なことを考えて情報を発信していければ、だいぶ変わっていくと思っています。

(杉山委員)

私からは、2つの視点で話をさせていただきます。まず、レガシー「③ 社会的バリアが解消されたまち～ユニバーサルなまち～」について、どれだけストレスフリーな環境を作るかという点が重要だと思います。先程から皆さんの話に出ている「情報発信」の手段としては、インターネット、スマートフォン上で行うべきだと思っています。その際のポイントとしては、正確な情報をリアルタイムで出す仕組みをどう作るかだと思いますので、成田さんがおっしゃられたことにもつながりますが、その仕組みをしっかり作って発信すれば、日本国内はもちろん、世界の中で川崎市がストレスフリーで誰もが快適に楽しめるまちという発信ができるのではないかと思います。

言うまでもなく、これからインターネットやスマホ環境が衰えることはないですし、5年前、10年前よりも、いろいろなユーザー、消費者の方は情報に敏感になっているので、その環境づくりを本気で取り組むタイミングだと思っています。

もう一つ、川崎にある約5000店のレストランを最大限に活用するというのを市の皆さんにお話

しさせていただいておりますが、本気で考えて良いのではないかと思います。先程から、情報発信という話題になっていますが、5000店すべては無理かもしれませんが、例えば、そのうちの10%、20%の店舗でよいので、このパラムーブメントに賛同してもらい、店にパンフレットを置いてもらうとか、発信の場としては、普段いろいろな方が食事をされているので活用していけるのではと思います。レストランを活用するというのは、発信の場としてだけでなく、コミュニケーションやコミュニティを作る場にもなると思っております。「かわさきレストラン・ウィーク」のときに、市長や成田さんにも来ていただき、レストランで食事をしていただいたのですが、飲食店も売り上げを作っていくのは簡単ではない中、例えば、月に2回、土曜日の昼間の時間帯は、地域の障害のある方と健常者の方でレストランフェアみたいなものを行うとか、川崎育ちを食べながら、また、文化・芸術にも関わってくると思いますが、食文化を楽しむ会のようなものを年1回でも賛同してもらえるお店を作るとか、地道ではあるかもしれませんが、継続的にやっていくことで、じわじわと巻き込めるかたちを作れるのではないかと考えています。

レストラン側に立つと、現在、パラムーブメントのロゴのステッカーを店舗に貼るということで市と議論させてもらっていますが、ステッカーを貼るだけではまだ足りないとお話しております。ステッカーを貼った上で、飲食店向けの教育やセミナーなどを同時に行い、飲食店の方々から発信していただく。あるいはいろいろな方が食事を楽しんでいるということや「ぐるなび」やいろいろなメディアの方に発信していただけるような場を作っていくことを第2期推進ビジョンではやっていけたらいいのではないかと考えています。具体的に何をやるかを進めるタイミングだと感じています。

(福田市長)

パラムーブメントロゴのステッカーは、今、詳細を詰めているところでしょうか。

(井上オリンピック・パラリンピック推進室担当課長)

はい、ぐるなびさんと議論させていただきながら進めております。

(杉山委員)

ステッカーを貼っても、店長などスタッフが変わるにつれて、貼ったのは良いが意識を持ってやっていない場合があるので、そこは、年に1回、セミナーをやっていくとか、市からマニュアル的なものや考え方を周知しないと形骸化してしまうように思います。

(福田市長)

町の要素として飲食店は非常に大きいですね。ありがとうございます。

(瀬戸山委員)

私はスポーツが専門なので、レガシー「④ 誰もがスポーツ・運動に親しんでいるまち」の「レガシーが形成された状態」について、身近な場所でスポーツをするための環境が整っているかという、健常者も障害者も含めて、スポーツをする施設は少ないと感じます。その理由の一つとして、

学校を卒業した瞬間にスポーツに触れ合う機会が減ってしまいます。普通のサラリーマンは朝起きてどこでスポーツをやるのかというと、なかなかスポーツできる場がない。これは、障害者も同じです。

海外だと公園はスポーツをやる場所というイメージがあるのですが、日本では、皆さんの住んでいるところの半径 500m以内の公園を見ても同じような公園ばかりだと思えますが、もう少しスポーツに活用できるのではと思っています。ただ、都市公園法の問題があり、運動公園は運動することができますが、普通の公園は運動する場所ではなく散歩するところなのでだめとなっているので、それが問題だと思っています。

それから、「すべての人にとって、公平にスポーツを観戦できる環境が整っている」という意味では、今回、平昌オリ・パラで、オリンピックの方はたくさんメダルを取って盛り上がり、民放でもよく放送されていましたが、パラリンピックが始まると、民放ではほとんど放映されず、ニュースで結果が少し報告されるだけでした。なぜかという、障害者のスポーツレベルもあるかもしれないが、それは、体験してみれば「すごい」ということがわかると思うので、世界的に努力しないとこんなプレイはできないということを我々が実感できていないので、そこが視聴率につながらず、民放では放送しない理由なのではないかと思われま。どうしたら、もう少しパラリンピックをNHKだけでなく民放メディアも取り扱ってもらえるのが問題であると思います。

また、日常でスポーツを楽しむ場合に、1つの例としてフィットネスで体を鍛えることが盛んです。もう一方、治療のためのスポーツもあります。そして、この中間として、運動しながらそれが治療に繋がるようなもの、例えば 50 代になり、五十肩になり肩が上がらなくなって一切スポーツはやらなくなった方が割と多いそうですが、体を動かしながら治療するという概念をもう少し世の中に普及させたら良いと考えています。

スポーツの世界では、「フィジカルトレーナー」「コンディショニングトレーナー」の二つがセットになっています。しかし、一般の中では、「フィジカルトレーニング」と「治療」は完全に別れています。そこをくっつけるところがないので、なかなか障害者がスポーツの方に、スポーツをしながら治療していくという考え方が世の中に広がれば皆さんの見方が変わるのではないかと思います。

それから、初めの方の話にあった、大人の理解でいうと障害者イベントはかなり増えています。私の会社でも、障害者体験イベントを行っています。依頼内容としては子ども向けのものが多く、または子ども向けではなくても「小さいお子さんでも体験できます」としたときは、親御さんは絶対参加しません。それはなぜかという、子どもがやるのを大人がやるのは恥ずかしいからとかがあるのですが、他にも車いすバスケットをやりたいと言ってもお父さんたちはやりません。そこが改善されれば、もう少し大人の方に障害者スポーツを体験していただいて、障害への理解度も変わるかもしれないし、理解がないから参加しないのかもしれませんが、そこが課題かなと考えています。

(丹野委員)

今もお話のあった、大人のパラスポーツ体験という点については、イベントものもありますが、「やってみるキャラバン」では、地域の寺子屋でも実施しており、子どもとともに保護者も参加し

ています。この場合、保護者はほぼ強制的に参加してもらっています。例えば、車いすバスケット体験などを行うと、目からウロコが落ちるという感じで、「こんなに楽しいスポーツなんだ」とか、「車いすってこういう乗り物なんだ」という反応が大人からダイレクトに返ってきます。

子どもについても、実際に体験する前と後では全く反応が変わってきます。こういうパラスポーツに触れ合う機会はこれからもぜひ続けて欲しいと思います。ただ、「やってみるキャラバン」は、年間20校程度の小学校で実施していますが、市内には120校弱あるので全部の学校が体験するには5年ぐらいかかってしまいます。そのため、小学校にいる間に一度も体験しないで卒業する子も出てきてしまう。そこで、先程、教員向けの初級障害者スポーツ指導者養成講習会の話があったので、ぜひ先生方に指導方法を身につけていただき、せっかく市で購入した車いすバスケット用の車いすや、30年度にはフライングディスクの購入等も予定されているようなので、そのようなものを有効に使って、1年間で市内全校が障害者スポーツを体験できるようになると良いと思います。

一方で、指導してくれる方の数が少ないのが問題です。1年間で百何十校を実施する分の指導者を充てるというのも難しいので、ぜひとも教員を有効に指導していただき、せめて小中学校の義務教育中に1回は体験してもらって理解を深めていただきたいと思います。そして、寺子屋で保護者とともに体験してもらい、保護者の方にもしっかり意義を考えてもらえると、レガシーが形成された状態につながっていくと思います。

(土岐委員)

私どもは、推進ビジョンの取組の方向性でいうと、まちづくりや都市の魅力向上における分野に関わっていると思います。ずいぶん前にもこの話をしたことがあると思うのですが、私どもの「ラ チッタデッラ」というのは、イタリアの街並みをモチーフにした商業施設ということで、本物志向で公道の通りをイタリアから石を持ってきて敷きました。それが、ビジュアル的に評判がよかったのですが歩きづらいと言われてしまい、その辺の配慮が足りませんでした。理由としては、車いすの方やベビーカーで来ることができないことや、一番評判が悪かったのはハイヒールの方、また宅配便の方にも不評でした。その後、何年かそのままの状態でしたが路面が劣化してきて、国の補助金をいただけたので石畳の雰囲気を残しながらフラットにしたら、びっくりするほどベビーカーの方も車いすの方も増えました。そこで、恥ずかしい話ですが、初めて今までいかにその方たちがここを避けていたのかに気づかされました。最終的には、舗装し直してよかったと思いましたが、ハードをいじるのは、そもそもの解決策ではないと思っています。

もともとイタリアやヨーロッパは石畳で、今は何百年も経って、すり減って少しは歩きやすくなってはいますが、そこではどうしているかという、車いすとかベビーカーとか困っている方を街の人が手助けする文化があって、例えば階段であれば、たまたま通りかかった人が普通に手伝ってくれたりするわけです。ですから、歩きづらいのをすべてハードのせいにしてしまうと、あちこちに限界が出てくると思います。人間の心には限界はないので、綺麗事のように、むしろそちらの方を目指すべきだと思います。

また、昨年、1日で5万人ぐら集まった子育てママのイベントを行いました。その際、川崎市に間に入ってもらい、ベビーカーのマナー啓発キャンペーンをJRとやりました。そして、母親の方にマナーを守りましょうと啓発するとともに、サラリーマン等は通勤ラッシュ時とかにベビーカー

一の方がいるとイラつく気持ちが芽生えたりする問題が起こっているのです。そこで「皆で未来の宝を暖かく見守ろう、ママを応援しようよ」というキャンペーンを行いました。ラ チッタデッラに来てもらうことも大事ですが、そこに来る過程の段階で外に出づらいとなると、それも難しくなってしまうので、結局これもハートの問題ですから、我々はそれを意識してやっていきたいと思います。

(北條委員)

私の方は主に文化面の話になりますが、レガシーということで考えてみると、例えば芸術という側面だけでは人は動きません。私は今、美術館に携わっていますが、いろいろな特別支援学校や福祉作業所の方であっても、最初に言われるのが「そこまでバリアフリーでいけますか」ということです。多いのは、「お昼時にお昼を食べられますか」「それは、通常の時間で大丈夫ですか」と聞かれます。レストランの人と話をして「11時から12時までの間であれば、ストレッチャーに入っている方を優先的に入れます」と話をします。「普通の方もいます」というと嫌な顔をする人もいます。

最近、年配者は、街中でスポーツをしたくてもなかなかできないので、自分のスピードに合わせて歩け歩けと指導されている方が多くいらっしゃる。杖を付いて、ストックを持って街中を歩いている方が増えています。この方たちは、街中の案内の説明書きが小さいので、キャッチコピーは大きくしろと言っている話をよく聞きます。当然、美術館ですので展覧会をやります。アールブリュット展を行ったときに気がついたのが、製作している方というのはほとんどの現場でいろいろやっています。スポーツと芸術は、各自の身体障害者施設などで行われていると思うのですが、実際にそれを発表する場が非常に少ないです。それをどうやって発表してもらい、なおかつ見てもらうか。見るときは必ず家族も来ますので、アールブリュットの展覧会をやると通常の展覧会の倍の人数の方が来ます。このように、障害のある方もない方も一緒に行って、一緒に観るということが必要なのではないかと思います。

先日、腰が痛くて入院したのですが、当然、病院には車いすの方が多くいましたが、車いすの操作の仕方がわからない方が多く、家族もわからないというのが多いことに気づきました。確かに使う機会もそれ程ありませんし、そういう部分も含めて美術館では、長時間の鑑賞に備えて、足の不自由な方のためにかかなりの数の車いすを用意してあります。そのように心も建物もといったバリアフリーも含めて、いろいろな取り組みを行って、初めて一つのレガシーになると思います。

レガシーの端的な例では、実は先週、万博記念館にある岡本太郎が作った太陽の塔の内部公開を48年ぶりに復活させました。今までは、耐震性がないことや塔なので内部を見るには上がって歩かなくてはなりません。万博開催のときは、中にエスカレーターがあったが、それは取ってしまったので今はない。バリアフリーにできないということで議論がありましたが、内部を少し狭くしてエレベーターを導入して回れるようにしたのです。外から見てもエレベーターがあることはわかりません。「50年前に子どもだった頃来たよ」「おばあちゃんと一緒に来たよ」「親に連れられて来たよ」というきっかけが一つのレガシーとなって、今50年経ち、新たなモニュメントになって大きな遺産となり活用しようとしている。それは、大阪万博をもう1回やりたいということ。その時のシンボルモニュメントとしよう、あの時の活力をもう1回思い出そうと。その意味ではこれから、この川崎のレガシー、150万市民が、パラの理念に関連して、何か1つでいいから、その取り組みに

接触する。それにはパラリンピックを観るのが一番良いと思います。オリンピックは観戦料金が高いし、ロンドンオリンピックのときも、ロンドン周辺の人が大勢見たというのは、パラリンピックだった。この川崎の地の利からすると、都心まで 20 分あれば行ってしまう。最近、東横線、小田急線も含めて非常に東京に繋がりがやすく、パラリンピックの会場に行きやすい最も近い都市だと思います。そこに参加することによって一つのレガシーとなると思います。あのときにパラスポーツをやった、パラリンピックを観たなど、何か一つやることでさらに繋がっていくといいと思います。今、外国人が多くいますので、外国の言葉もわからないとダメな時代になっているが、テクノロジーもそのような時代が来ると感じています。そういう点ではテクノロジーも進めてもらえればと思います。

(横島委員)

障害者差別解消法が施行されてから約 2 年が経過していますが、いろいろな自治体で障害のある方への合理的配慮に関する冊子が作られています。その良いところ取りをして、ぜひ川崎でも作っていただけたらという思いがあります。菊地委員のところでは絵本を作られていましたが、正に子ども目線の合理的配慮について書かれているということで、その冊子は学校に配ることになっていたのでしょうか。

(菊地委員)

今後、学校に配ることができれば、図書室などに置いてもらいたいと思います。

(横島委員)

なかなか良い本ですので、ぜひ各学校に置いていただけたらと思います。

そういった中、心のバリアフリーの話でいうと、川崎でいろいろな障害者スポーツ大会を誘致しています。アンプティサッカー、ブラインドサッカーのほか、カルッツかわさきではデフバレー、先日はボッチャの関東大会がありました。今年の秋には、サウンドテーブルテニスや聴覚障害の方のテニス大会などもあります。どうしてもこのような大会は関係者や大会役員の方しかギャラリーがないので、市障害者スポーツ協会も「スポーツデー」や「やってみるキャラバン」などを通じて、子ども向けのものを計画的に行うことはありますが、「見る」ということも非常に大事なので、動員をかけるという語弊があるかもしれませんが、今後は、このような大会にぜひ子どもの方の応援をできるような環境づくり、教育委員会の方も大変でしょうけれども、どこかの学校が応援にいくとか、デフバレーの試合は、拍手をしても誰も聞こえないので気づきませんが、手をふれば観客のことをわかるということを体験できることにより、手話が一つ覚えられるということも必要だと思います。これから障害者スポーツを誘致することに関しては、子ども向けだけでなく、親子連れでも見ていただきたいですし、入場無料でも来ないことが多いので、ぜひ何とかして見に来ていただいて、それをレガシーとして残せればと思います。

(大塚委員)

今回、いろいろとレガシーが出ている中で、重要なのは「自分ゴト化」だと思います。特に大人

の方が興味・関心を持ってないなどの問題がありますが、実際、私の会社でやらせていただいていることを事例として挙げますと、パラスポーツに対する企業からの協賛を求めるということをしており、プロスポーツでユニホーム等に企業名が入ると相当な効果があると思いますが、例えば、車いすバスケットで12社から年間10万円ずついただき、それだけで120万円になっている。それは、トレーニングウェア制作のために行ったものですが、それをやっていたら、ある大企業から「ユニホームに名前を入れさせてください」と話があり、年間100万円いただけるということで、合計で220万、車いすバスケットのチームに入ることになりました。この何が良いかというと、正に「自分ゴト」で、各企業では、自分たちがスポンサーをしているので、観戦しに来てくれるようになったことが成果としてとても大きいと思っています。その際、社員のお子さんたちも連れて一緒に観に来てくれています。そこから車いすバスケットのチームでは、毎回ではないですが、大会の始まる前に車いすバスケット体験の時間を設けて、親子で体験してもらうことを実践しています。

お子さんへの教育については、私どものNPOでは、社協さんとコラボのイベントで年間10校程度訪問させていただいています。内容としては、始めに「みんなの周りがあるバリアとバリアフリー」というテーマで講演をして、その後、実際に車いすに乗りながらまち歩きをします。そうすると、いつも登下校で通っているところの中で、意外と子どもたちがバリアと感じていなかったところが明らかになります。

一例を挙げますと、子どもたちがいつも使っているバス停のところに落ち葉がいっぱいあり、そこを車いすで通ってみると、朝露ですべてしまい、車いすを漕げなくなっていました。そして、そのバス停が学校の目の前だったので、子どもたちは一斉清掃のときにバス停の落ち葉も掃いてくれるようになりました。また、もう一つ面白かったのが、「小石を蹴って帰らない」ということです。石ころを蹴りながら帰る子どもたちもいると思うのですが、その小石が車いすに挟まると移動ができなくなったことが、まち歩きをしたことによって子どもたちなりに学んだということです。

そういった授業を行わせていただいた後、子どもたちがそのことを絵日記に書き、それを親御さんが見て一言書いてもらうということをその学校では行っています。それによって親御さんの視点も入りますし、何より嬉しかったのは、私が授業を行った後に、そのクラスの子たちが、自分たちの学区内にある多目的トイレがどこにあるかというマップを作り、実際に障害者施設や高齢者施設に配っているということがありました。

飲食のことは、パラムーブメントのロゴステッカーについては、年間2回の研修をやるということになるのであれば、もし可能なら、研修を受けたらステッカーを更新するというかたちでステッカーのデザインを変えていくと良いと思います。例えば、2018年バージョン、2019年バージョンとステッカーのデザインを変えて年々更新していることが一目でわかるようにできると、「この店は、大分前に研修を受けたけど更新していない」とか市民的にもわかると思います。

あと2点、スポーツに関連して、「ゆるスポーツ」というのがあります。私の友人がやっているのですが、川崎市ならではの資源・資材を活かして、スポーツを作っていくこともできると思います。例えば、「ハンドソーブラグビー」は、石鹼でヌルヌルになった手でボールを扱う競技で、ボールを落としてしまうと相手のボールになってしまうというもので、運動神経がいい人も悪い人も皆が平等に誰でもできることがテーマで考えているものがあります。また、「芋虫ラグビー」は、

下肢を完全に固定された状態で行うので、下肢が使えない人と一般の人が同じ状況と一緒にラグビーができるものです。それを川崎の資源を使ってできたら面白いのではないかと思います。

最後に、障害者とどう触れ合えばいいのかわからないとか、障害者へのサポートの仕方がわからない、ということについて、このパラムーブメントのロゴマークを上手く利用して、どのようなアシストが良いアシストなのかなど、それぞれロンドンの話も出ましたが、ロンドンでエレベーターのないところでは、乳母車を使う人が階段を上る場合は周りの人が乳母車を持っていくのを手伝ってあげるといのは文化的な側面、ロンドン紳士のレディーファーストの精神が根底にあるからできるのかもしれませんが、日本人はなかなかできないと思うので、これをやるとスマートですよというような、例えば、“パ”な人たちになれるという感じで、階段では、ベビーカーで困っている人がいたら手伝おうという面白いイラストがあれば、こうすればいいのかというのがわかりますし、成田さんのおっしゃった、電車の中では車いすユーザーはこのようなポジションを取りたがっているというのがわかるイラストを書いて、そのスペースを譲るのが“パ”の人たちという感じで示せるとよいと思います。わかりやすいイラストで、こうすれば良いということがわかれば、より「自分ゴト」にできるのではないかと思います。

(中澤委員)

皆さんが言われたように、どう気づいてもらうことが大事だと思います。今の交通機関は、すべての路線バスに必ずスロープがついていますが、健常者の方は車いすの方がどう乗るかを知らないもので、車いすを固定する場所にシールが貼ってあるが、そこにいる人がどいてくれないということがあります。特に高齢の方はほとんど知らない。そのようなことは車内の案内等を書いてあることですが、それをどのように伝えていくかが課題だと思います。皆さんのハートにどう伝えていくか、全員が気付ける仕組みがないものかだと思います。理屈も大事ですが、気持ちでわかるものをこのパラムーブメントの中で作り上げられると良いと思います。

(福田市長)

ありがとうございます。各委員からそれぞれ素晴らしいコメントをいただきました。これまでの御意見を踏まえて、成田共同委員長の方から何かありますか。

(成田共同委員長)

先ほどの平昌オリ・パラの放送権の話がありましたが、どうしてもNHKが放送権を買ってしまうので、民放での放送がどうしても難しくなってしまうのですが、東京で開催される際は、どの局でも私たちのスポーツを見ることができる環境であって欲しいとは思っています。

(福田市長)

たくさん課題がありますが、少し良い話をしますと、障害者スポーツの全国大会を川崎が誘致しておりますが、昨年より確実にアンパティサッカーもブラインドサッカーもお客さんが増えています。昨年よりも盛り上がっていますし、スタジアムにお客さんが来て楽しんでいるのは、やはり見て楽しいと感じているからですし、私も他の予定がありましたが、なかなか席を外せないぐらい

楽しかったです。

そして、その大会単体では観客を集めるのが難しい場合、委員からの話の中で応援等も含めて、合わせ技にして皆でやりましょうという話がありましたが、川崎でブラインドサッカーの大会を行った際は、世界的な会計事務所がスポンサーになってくれていて、その企業が社員を集めて、同じフィールドの隣のコートでサッカーを行いました。その社員の家族の方もたくさん来ていて、隣のコートのブラインドサッカーを見て、すごいなと感じてくれて観客が増えると。ですから、いくつか合わせ技でやっていく必要があるのではないかと思います。例えば、障害者スポーツにスポンサーをつけ、それによって応援する人が増えて、観客も増えて、スポーツを知ることになり、いくつか合わせ技でやると好循環が生まれてくると思います。実際に、そのような例が若干でもできてきているというのは良い流れだと思います。

ただ、遠藤委員がおっしゃったように、もう少し理解を深めていく具体的な取組について、本日は時間がなくて深められませんでした。成田委員の最初の課題認識にどうしていいのかということ、今日結論は出ませんが、こんなことをやったらいいのではないかと、何か一つやればすべて解決するということはありえないので、こうすれば良いと思うところは合わせ技でやっていきたいと思っています。それでは、議題はこれですべて終わりました。連絡事項を事務局よりお願いします。

(原オリンピック・パラリンピック推進室長)

本日の意見、課題については、次回整理して示したいと思っています。また、委員の皆様につきましては、今月末までで任期で満了となりますが、来年度も引き続きフォーラムを開催するに当たり、基本的には、皆様に再任していただきたいと思っていますので、追って再任依頼の文章を送らせていただきますのでよろしく願いいたします。

最後になりますが、議事内容につきましては、ホームページで公開させていただきますので、議事録の確認をしていただくこととなりますので、宜しくお願いいたします。それでは、長時間にわたり本日はありがとうございました。